

『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長
—その2 『カスピアン王子のつのぶえ』における靈的相剋と肉的闘争—

野呂有子

Thomas Howardは、ナルニアを‘the forgotten country’と呼んでいる。¹『カスピアン王子のつのぶえ』においては、往時のナルニアの姿は住民からさえも忘れられたものとなっている。「もの言う木々」、「もの言うけものたち」、そしてアスランの存在を信ずるものはごくわずかであり、「そんなものはみな乳幼児むぎのたわごとにしすぎない」とされている。²

ナルニアを侵略し征服したテルマール人は、木々やけものたちを「もの言わぬものにし」、³言い伝えを恐れて巨大な森をしげらせた。ケア・パラヴェルの城はうち捨てられ、化物のすみかであると信じられていた。こうした中であって、カスピアン王子は往時のナルニアにあこがれを抱き続け、やがて、隠れ住んでいた生き残りの小人たちやけものたちと出会い、力を合わせて敵のミラツ王と戦い、本来のナルニアを回復しようとする。しかし、敵に追いつめられ、魔法のつのぶえをふいて助けを求める。このぶえの魔力によってイギリスからナルニアに呼びよせられたのが、四人の兄妹、ピーター、スーザン、エドモンド、そしてルーシーだった。

しかし、四人の子どもたちがカスピアンに合流するのは容易なことではなかった。子どもたちがイギリスに帰って一年が過ぎていたが、その間にナルニアでは何百年もの歳月が流れ、ケア・パラヴェルの城は崩れはてていた。そして、カスピアンの子供のトランプキンと出会うまでは、自分たちが(ナルニアに)呼ばれた理由さえもわからなかった。生いしげる木々のために道に迷いながら進み続ける子どもたちがまず戦わなければならなかったのは、自分たち自身の心に巣くう「不信」という敵であった。彼らはまず、この内なる敵を克服し、その後ミラツ王と戦うことになる。そして、この「不信」との戦いを通してアスランとの関係を回復してゆくことこそが『カスピアン王子のつのぶえ』を貫くテーマであるといえよう。⁴

さて、この小論では、四人兄妹が「不信」と戦っていく中でどのように判断し、どのような行動をとっていくかを見ていこう。それはそのまま、子どもたちの靈的成長をあとづける作業になるであろう。

(i) ケア・パラヴェルの城あとで

ナルニアにもどってきた子どもたちがまず直面したのは食物の問題だった。たまたまもっていた二人分のサンドウィッチを四人で分け合うが、それで飢えが満たされるわけではない。つい不平をもたすスーザンに対し、森を探検して食べられる植物を探そうと提案するのはエドモンドだった。スーザンが過去を悔むのとは対照的に、エドモンドは前向きの姿勢で問題の解決に取り組もうとしている。

森の中を進む内、四人はケア・パラヴェルの城あとにやってくる。そこには枝もたわわにリンゴの実がなっており、一同はようやく飢えをいやすことができる。焚火を囲んで話すうち、ルーシーは宝蔵のことを思い出す。入口を捜し出し中に入ろうとする三人をおしとどめようとするのはスーザンである。

この宝蔵のとびらは、「不信」との闘いの第一の関門と言えよう。宝を目にしていながらその存在を疑うものはない。だが、宝が目前になくともあらゆる理性的判断によって宝蔵に通ずる道が示されているとき、敢えて一歩踏み出せないということがあるのではないだろうか。ちょうどスーザンのように。しかし、ピーター

¹ *The Achievement of C. S. Lewis* (Harold Shaw Publishers, 1980), p.21.

² C. S. Lewis, *Prince Caspian* (1951; rpt. London: William Collins Sons & Co. Ltd., 1984), p.43.

³ *Ibid.*, p.50.

⁴ 柳生望氏は、『ナルニアの国は遠くない』(新教出版社, 1981年, p.82)で、「この作品の主題の一つは懐疑(不信)の時代における信仰についてである。」と言っている。また、中尾セツ子氏は、「詩人・作家としてのC. S. ルイス」、山形和美編著、『C. S. ルイスの世界』(こびあん書房, 1983年, p. 105)で、「本書の中心課題は、ナルニア国の自由の回復であるが、それはアスランへの信仰によって進展している。」と言っている。

の言葉は、⁵いたずらに決定的瞬間を先へのはそとすることの忌まわしさをいましめているといえよう。⁶

エドモンドの懐中電燈で一同の口からはかん声もれる。よろいかぶとが立ち並び、その間の棚には、首飾り・腕輪・王冠・ダイヤモンド・ルビー・エメラルド等が積み重ねられている。読者は一気にファンタジーの世界にひきこまれていく。

しかし、これらの宝は「砂利石かじゃがいもか何かのように」積み重ねられ、長い年月の間に「厚くほりをかぶっていたので、自分たちのいる場所がどこだかちゃんとわかっていて、品物のほとんどを覚えていなければ、これが宝物だとは思ってもよらなかったことであろう」⁷と作者は述べている。何も知らぬ人間がたまたまここへ入ってきて、物置か納屋としか思えなかったことであろう。内的にすんだ眼をもつ者だけが物事の本質を見分けることができる、というルイスの主張が、さり気ない描写の内にごく自然に表れている場面である。⁸

(ii) トランプキンとの出会い

やがて、子どもたちは処刑される寸前の小人、トランプキンを救い出す。彼はカスピアンの命令で子どもたちを迎えにくる途中、敵にとらわれたのだった。話を聞いた子どもたちは使命を自覚し、小人とともに出発しようとする。

しかし、小人は子どもたちを見てとても戦力にはなりそうもないと判断する。もともとトランプキンはアスランの存在やつのぶえの魔力を信じていたわけではない。使者としてやって来たのもカスピアンに対する忠誠心のゆえだった。子どもたちはまず自分たちに対する小人の「不信」を取り除かなくてはならなかった。

小人が自分たちの力を不当に評価していると知ったエドモンドはまっかになって怒るが、ピーターになだめられ、ルースイーに忠告されてようやく気を落ち着ける。かつて彼が自分の感情をおさえることができず、そのために悪へと傾斜して行ったことを思い合わせると、⁹格段の成長と言えよう。怒りをあらわにしてしまうという点では、まだまだ未熟であるが、少なくとも、忠告を受け入れ、感情をおさえることができるようになったのだから。さらに、自分を信じてもらえぬことがいかにもどかしく苦しいことであるかを、彼は身をもって知ったはずである。

宝蔵で武器をつけて「身も心もいっそうナルニア人らしくなった」¹⁰エドモンドは騎士らしく剣術の試合を申し込みトランプキンをうち負かす。次に、小人はスーザンと弓の射くらべをして負け、最後にルースイーに傷をなおしてもらって、もはや四人の力を信じないわけにはいかない。彼は即座に自分の非を認め忠誠を誓う。なかなかの頑固ものであるトランプキンに読者が捨てがたい魅力を感じるのには、この潔さ、謙虚さ、そして、到る所で顔を出すそのユーモア感覚に負う所が大きいと言えよう。

(iii) アスランとの再会

島を抜け出し本土に上陸した一行は疲れ果てて眠ってしまうが、ルースイーだけは寝つけない。小鳥のさえずりにうながされるようにして木々に話しかけ目覚めさせようとするが、もう一歩という所で不首尾に終わる。

森の中で道に迷いかけながら、一行は下を川が流れる絶壁のふちまでやってくる。この道中で、トランプキンは熊を倒したり、内輪もめをおさえたりしてめざましい働きをする。子どもたちは、実践と経験に裏打ちされた彼の判断力と行動力に感服する。

小人の言葉に従って進路を決定しようとした時、アスランが現れ逆方向を示して一同を導こうとする。ただ一人、ルースイーだけがアスランの姿を見てその意向を直感的に理解するが、そのためにつらい立場に

⁵ *Prince Caspian*, p.26.

⁶ Cf. C. S. ルイス著、蜂谷昭雄・森安綾 共訳 『悪魔の手紙』(新教出版社、1983年)pp.29-30.

⁷ *Prince Caspian*, p.28.

⁸ 『最後の戦い』において、馬車小屋に入った小人たちは、アスランの御馳走を与えられても、アスランを信じないため、それを御馳走とは認識できない。Cf. 柳生望, pp. 162-63.

⁹ 拙論、「『ナルニア国年代記』における子どもたちの成長—その1 『ライオンと魔女』におけるエドモンドの成長』『東京成徳短期大学紀要』第18号(昭和60年3月)を参照いただきたい。以下略して「子供たちの成長 その1」とする。

¹⁰ *Prince Caspian*, p.92.

たたされる。ピーターもスーザンもアスランを見ることができず、ルーシーを信ずることができない。アスランの存在を頭から信じないトランプキンが暴言をはいてルーシーを激怒させる。

カーク教授がこの場にいたなら、ルーシーが「嘘をついているか、狂ったか、本当のことをいっているかのいずれか」であり、最初の二つのどちらでもない以上、必然的に三番目の可能性しかない、という言葉を繰り返したに違いない。¹¹ピーターとスーザンは再び同じ誤ちを犯したわけである。

しかし、エドモンドは違っていた。

「ぼくたちがナルニアを初めて見つけた時、………最初に見つけたのはルーシーだった。だけどだれもルーシーのことを信じなかったよね。中でもぼくは最悪だった。そして結局ルーシーは正しかったんだ。今度もルーシーを信じるのが公正というもんじゃないかな。」¹²

エドモンドの言葉には同じ轍を二度と踏むまいとする者の決意のほどがうかがえる。かつてのエドモンドを知る者にとっては感動的でさえある。ここには過去の自分を悔い、自省と内省を繰り返した者の姿がある。

王位についた後のエドモンドは「知恵と判断力の優れた」ものとなったとあるが、¹³その具体例には『カスピアン王子のつのぶえ』に豊富に見出される。熟考の末に、ナルニアと我々の世界では時間の流れ方が異なっていることを思い出した。¹⁴危険を避けて海路を取ろうと提案した。¹⁵そして、今、自分の目にアスランが見えないという現象にあって、考え抜いた末にルーシーを信じるという道を選択する。

……自分の信じていることをたえず思い起こすことが、われわれには必要なのである。キリスト教的信念にせよ、他のいかなる信念にせよ、一度受け入れる、というようなものではない。それは養わなければならないのである。……誠実な理性的検証の結果としてキリスト教を捨てた人が……どれだけいるだろうか。大部分の人たちは、何となく流されて離れていったのではないだろうか。¹⁶

これは、ルイスが信仰の習慣を養う第一歩として述べている部分である。そして、エドモンドは確かに「一度受け入れた信念を養う」努力を続けていると言えよう。¹⁷

ピーターは、一人一人に意見を尋ねるが、トランプキンの答えは、¹⁸豊かな経験をもってしても、絶対者の存在を信じない非造物の判断には限界があることを示している。スーザンの場合にはなお悪い。初めから森を嫌い、¹⁹そこから出ることばかりを望んでいる点では彼女は征服者のテルマール人と変わらない。そればかりか、疲労を理由に、真剣に考えることを否定している。自分の感情に左右され「力の限り努力することのできぬもの」とゆきつく所は破滅でしかない。アスランの示す道が「のぼり」であり、アスランを信ずることのできぬものとする道が「くだり」であることは象徴的である。

ピーターは悩んだ末にくだり道を選ぶ。一同はけわしい森をようやく抜け出し開けた所に出るが、その途端、敵の攻撃を受け、命からがらもと来た道に戻っていく。スーザンにとっては「いまいましい森²¹」が、実は、一同を守っていた。森にいたからこそ敵の攻撃を受けずに進んで来れたのだ。

その夜、アスランに呼ばれてルーシーが目覚めると、木々も目覚めて踊り始めた。アスランとの再会は「もの言う木々」との再会でもあった。

¹¹ The Lion, the Witch & the Wardrobe (1950; rpt. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1979), p.47.

¹² Prince Caspian, p.112.

¹³ The Lion, p.167.

¹⁴ Prince Caspian, p.34.

¹⁵ Ibid., p.98.

¹⁶ C. S. ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』(新教出版社、1984年)、p.220.

¹⁷ これは『銀の椅子』の主題にもなっている。

¹⁸ Prince Caspian, p.111.

¹⁹ Ibid., p.14.

²⁰ 「子供たちの成長 その1」,p.70.

²¹ Prince Caspian, p.116.

昼間の出来事について自分には落度はなかったはずと言うルーシーをアスランは凝視する。それは心の奥底まで見通すまなざしだった。

「私が悪かったとおっしゃるんじゃないでしょう？他の人たちをおいて私一人だけであなたのところはいなくなって、どうして、どうしてできたでしょう？そんなふうに見ないでください。……ああ、そうでした。できたはずですよ。あなたといっしょなら一人きりじゃなかったんですね。でも、そんなことしたからといって何になったでしょう？……そうすれば、どうにか、うまくいったらどうとおっしゃるんですか？でも、どうやって？おしえてください、アスラン、私には知ることはできないんですか？²²」

霊的にすんだ眼を持つルーシーは、何も言われなくとも己の非を悟る。たった一人でもアスランに従っていくこと、それこそ取るべき道だった。²³ここには、墮落後のイヴの誘いかけに対してアダムが選るべきであった道も示されていると言えよう。²⁴

だが、過去を変えることは誰にもできない。「仮に……だったとしたら」と言ってみても、そこからは何も生まれはしない。²⁵過去の誤ちにきついたら、そこを立脚点にして前向きに努力することが必要なのだ。²⁶ルーシーに厳しい試練が課せられる。兄妹たちを起して、アスランのところへ連れて来なければならぬ。しかも、ほかの者にはアスランの姿は見えないかもしれないというのである。

一見、苛酷なこの仕事は、実は、アスランの深い愛の業からでたものだといえる。いったん道を踏み誤った者に対してやり直す機会を与えているのだから。これは、ルーシーにとってのみならず、残りの四人にとってもやり直しの機会なのだ。

カづけられて決然として試練に立ち向かうルーシーに、‘Now you are a lioness’, とアスランは言う。²⁷これは、この物語の枠組みにおいては最高の誉め言葉である。ルーシーはこの上なくアスランに近いものとして認められたのだ。

彼女がアスランのたてがみに手をおいて進む時、木々は左右に分かれて二人を通し、束の間、「完全に」人の姿をとる。アスランと「イヴの娘」、ルーシーとの関係の回復は、「もの言う木々」と人の関係の回復を意味し、同時に、ナルニアの回復をも意味している。すべてのことの成就がここに集約的に象徴されている。

昼の疲れで熟睡している者を四人も起こすのは簡単なことではない。ピーターは良い返事をしてルーシーを喜ばせるが、また、すぐに寝入ってしまう。霊的に目覚めようとしても身体が付いていかない。スーザンは、はっきり目覚めるが、ルーシーを信じようとはしない。物理的には目覚めていても、霊的には眠っていると見えよう。対照的ではあるが、どちらも、霊的覚醒と肉体的覚醒が一致していない。霊と肉とが調和しない状態にある。

エドモンドはなかなか目覚めないが、いったん目を覚ました後は、不機嫌さを隠せないながらも、ルーシーを信じ協力する。ピーターもトランプキンもルーシーについていくと決心するが、スーザンだけは反対する。

ルーシーが「自分一人だけでも行かなくてはならない」と訴えて並々ならぬ決意を見せた時、スーザンは「四対一」であるとか、「最年少」であるとかの表面的な理由をたてに威嚇し、それでも自分の言い訳が通らないと、ルーシーの言葉を逆手にとって「皆が行こうが行くまいが、私はここに残ってやる、と言ってみてもいいのよね²⁸」と、あくまで強弁しようとする。

しかし、「説得²⁹」に似て非なるものである。それは議論のための議論に過ぎず、そのもととなる信念も根拠

²² *Ibid.*, pp.124-125.

²³ 『ライオンと魔女』において、ビーバーが、行ってアスランに会うことこそエドモンドを救い出す唯一の道なのだ、とさとしたことにも通ずる。Cf. 「子供たちの成長 その1」, p. 70.

²⁴ Cf. John Milton, *Paradise Lost* ix.

²⁵ C. S. ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』(新教出版社,1984年),pp.105-106.

²⁶ *Prince Caspian*, p.125.

²⁷ *Ibid.*, p.126.

²⁸ *Ibid.*, p.129.

²⁹ 拙論「ミルトンの英雄観 その3」『東京成徳短期大学紀要』第16号(昭和58年3月), p.31.

も薄弱であるために、スーザンより以上に現実的で、ある意味では、本物を見分ける力を持つトランプキン³⁰に簡単にいなされてしまう。

ルーシーは口びるをかみしめ、スーザンに言ってやりたいことを言わないようにと努力しながら、先頭に立って歩き続ける。そして、アスランにじっと目をそそいでいる内に、そんなことは皆忘れてしまう。³¹

ここでは、ルーシーが霊的相剋を通してアスランとの関係を確認するものにしていく姿が端的に描かれている。霊的相剋においては、主眼は、相手を論破することにあるのではない。相手を論破することに力を入れすぎて却って自分を見失ってはなにもならない。あくまでも、絶対者と自分との関係を回復していくことに主力がそそがれるべきなのだ。この意味で、ルーシーがスーザンを言い負かそうとせず、あくまでも、自分とアスランとの関係を見据えようとしたのは、意義深いことだと言わざるを得ない。³²

やがて、エドモンドに、次にはピーターに、アスランの姿が見えてくる。切りたった険しい崖を這い上がり、石舞台にたどりついた一同の前にはアスランが待っていた。アスランは、一人一人にねぎらいの言葉をかけ、今は深く自分を恥じるスーザンにも息を吹き込んで勇気づける。³³

そして、「アダムの子」、ピーターとエドモンド、「大地の子」、トランプキンは、ただちにカスピアン王子のもとへ赴くよう命令される。新たなる闘い——味方の陣営内の反乱分子との闘いとミラツとの武力闘争——が待っている。

アスランがエドモンドをねぎらって言う、「Well done,」の言葉は、³⁴ジョン・ミルトンの『楽園の喪失』、第6巻 29 行の神の言葉を想起させる。熾天使 Abdiel は一度は Satan の奸計を見抜き、その誘惑に屈せず、「ことば」による Satan との霊的闘争を通して、神との関係を回復し、ただ一人神のもとにもどってくる。その時に、神が Abdiel をねぎらって言うのが、この「Well, done,」に始まる言葉である。³⁵神は、霊的闘争における Abdiel の働きを称え、今度は、Satan との武力闘争に神の軍団とともに赴くことを命じる。³⁶

自分の内面にある「不信」との相剋に打ち勝ち、絶対者との正しい関係に立ち戻り、その後、外敵との戦いに赴くという点、すなわち、霊的相剋を経て武力闘争に臨むという点で、『カスピアン王子のつのぶえ』におけることもたちと『楽園の喪失』における Abdiel は共通している、といえよう。

(iv) ニカブリクの裏切り

征服者に支配されるナルニアには、今や、「不信」が根強くはびこっている。テルマール人はもとより、小人の中にもアスランの存在やピーター王たちの時代を信じない者は多い。カスピアン王子は、ミラツ王との戦いの他に、味方の陣営の中の、こういった勢力とも戦わなければならない。

ピーター達三人がアスラン塚に入っていくと、黒小人のニカブリクが不審な仲間を二人従えて、今までの戦いの無残な結果の責任が王子にあると迫及しているところだった。つのぶえの魔力が働かなかったと即断したニカブリクは、黒魔術によってあの「白い魔女」ジェイデイス³⁷を呼びだすことを提案する。ナルニアを百年支配した魔女には、アスランやピーター王などよりもはるかに現実的な「力」と言う。アスランを信じないだけでなく、カスピアン王子をないがしろにして、自分達、黒小人族だけの繁栄を望むニカブリクの論理は、まさに「悪魔の論理」と言えよう。³⁸

³⁰ トランプキンはルーシーに襲いかかった熊がもの言わぬ、ただのけものであることを一瞬にして見抜き射殺す。腕くらべでは、スーザンが勝ったが、実戦においてのトランプキンの力はスーザンを凌駕する。

³¹ *Prince Caspian*, p.129.

³² George Parfitt は *English Poetry of Seventeenth Century* (London and New York: Longman, 1985), p.194 において、John Milton, *Samson Agonistes* (1671) では、「〔神に対する疑問の〕答えは、答えを見つけ出すことにあるのではなく、そうした疑問を乗り越え、神の正しさを受け入れる信仰にある」と言っている。ここの関連でも非常に示唆に富んだ指摘である。

³³ 神は息を吹き込んで人に生命を与えた。Genesis 2:7.

³⁴ *Prince Caspian*, p.133.

³⁵ 詳しくは、「ミルトンの英雄観 その3」を参照いただきたい。

³⁶ *Paradise Lost* vi, ll. 29-43.

³⁷ 『ライオンと魔女』に登場する悪の化身。

³⁸ ニカブリクの言葉は、『楽園の喪失』第1巻 128行-155行のベルゼバブの論理に通ずる。Cf. 「ミルト

連れの正体を見破られ、ニカブリクら三人はカスピアン王子たちにとびかかる。そこへ、ピーターたちがとびこんで加勢し、ニカブリクたちは殺される。この時、鬼婆の首をはねたのはトランプキンだが、その後、灯が消えて闘争は闇の中で行われる。再び灯がつくと狼男とニカブリクも死んでおり、「誰がニカブリクを殺したかはわからない」。³⁹

作者 C.S.ルイスは『カスピアン王子のつのぶえ』の中で、殺生に対しては一貫した態度をとっている。四人の子どもたちは、どんな場面でも一度も殺生を行わない。トランプキンを敵の手から救った時、スーザンは、わざとはずして弓を射る。敵を追い払うのが目的であって、殺傷することは本意ではない。⁴⁰森の中で熊に襲われたときも、これを射殺したのは、小人のトランプキンだった。また、カスピアン王子についても、具体的な殺生の場面には描かれない。これは、作者が幼い読者たちに十分配慮した結果であるといえよう。⁴¹そして、それとともに、作者の追及する中心テーマが、内的な闘争、つまり、個々人が靈的相剋を通して、絶対者後の関係を回復することにあるという事実を裏書きすると言えよう。

(v)ミラツとの決闘

ピーターは、ミラツに一对一の果し合いを挑む。戦いがミラツ側にとって圧倒的に有利な状況にあるときに、挑戦状が受理される可能性はきわめて低かったが、もし、受理されれば両陣営の実質的被害はずっと軽減されるし、受理されなくても時を稼ぐことができる。その間にはアスランが何か手をうってくれているであろう、というのがピーターの判断であった。

ミラツは挑戦を拒否する心づもりであったのが、部下のグロツェルたちの計略にまんまと乗せられ、臆病者と思われたくないばかりに、挑戦状を受理する。実は、この部下と言うのは、ミラツを王にするために、先王の殺害など様々な悪巧みに力を貸してきた、いわば腹心の者たちであった。彼らは、自分達の取り分が少ないと不満を抱き、ミラツをなき者にしてナルニアを乗っ取ろうと企てるのであった。彼らとミラツの間を結んでいるのは、「信頼」ではなく自分にとっての利益だった。利害が対立すれば、その関係が崩れるのは明らかだ。こうして、ミラツは、まず自分部下から裏切られて、破滅への道を踏み出す。

決闘が始まると、ピーターの形勢は次第に悪くなっていく。手首を捻挫して小休止に入った時、ピーターは、万一の時にはくれぐれも家族によろしく、と伝える。彼が死を覚悟していることが分かる。アスランに頼らず、「全力⁴²」を尽くして敵と闘わなければならない。

突然、ミラツは草むらに足をとられて、うつぶせに倒れる。ピーターは、騎士道に従って後ろへさがって待つが、ミラツはなかなか起き上がらない。機に乗じてグロツェルたちは味方の兵に偽りの情報を流して武器をとらせる。そして、どさくさにまぎれて、倒れているミラツを背後から刺し殺す。

既に指摘したのと同様、ここでもミラツを殺害するのはピーターではない。ミラツは自分でこぼし、背後から腹心(であったはず)の部下の手で殺される。ミラツは先には精神的に、後には物理的に自らの部下に欺かれて破滅する。ここには悪は自滅するというルイスの主張がはっきりと示されている。

(vi)ナルニアの回復

全面戦争が始まりカスピアン軍が善戦する。そこへ、アスランの咆哮によって目を覚ました木々たちが潮のごとくおしよせてテルマールの兵士たちを敗走させる。

アスランによってよみがえったナルニアには、バックスやスルナスを中心に陽気な踊りの渦が広がり、テルマール人たちの中には、逃げ出さずに、踊りの輪に加わっていくものも出てくる。

喜びの内に叙勲が行われ、カスピアン王は正式にナルニア国王として認められる。祝宴が始まり、もの

ンの英雄観 その3』,p.30. また狼男の言葉は『楽園の喪失』第2巻 670行-848行の〈死〉の叙述を想起させる。

³⁹ *Prince Caspian*, p.149.

⁴⁰ *Ibid.*, p.37.

⁴¹ 「子どもたちの成長 その1」について、「たんすのとびらを少しあけておく」のは、「幼い読者に対する作者の配慮だと考えられる」という愛情に満ちたご指摘を柳生直行氏よりいただいたことをここに記して、氏に改めて感謝と敬意を表したい。

⁴² Howard, p.50.

言うけもの、木の精、水の精、小人やフォーンが一堂に会してナルニアの回復を寿ぐ。

(vii)ナルニアからの帰還

ナルニアの回復を好まぬテルマール人には別の宇宙空間に住みかが与えられることになり、そこへ行くために三本の木を組み合わせて一種の門がしつらえられる。そして、四人兄妹もアスランやカスピアン、その他のナルニアの住民に別れを惜しみながら、この門を通して、もとの停車場に戻っていく。ピーターとスーザンは「大きくなりすぎた⁴³」ためにナルニアには戻れないことが明らかにされる。しかし、この話の最後を飾るエドモンドの「ナルニアに新しい懐中電燈をおいてきちゃったよ。⁴⁴」という言葉は、ナルニアにおける新たな冒険の可能性を読者に約束するものとなっている。

(viii)結び

先に『カスピアン王子のつのぶえ』の主題は不信との戦いを通してアスランとの関係を回復することであると述べた。この不信は、アスランの存在や古きナルニアの存在を信じぬテルマール人や黒小人達の中だけにあるのではなかった。それは、四人の子どもたち自身心の中心に、ルーシーの心の中心にすら存在した。アスランを見ることのできないピーターやスーザンはルーシーを信ずることができなかった。また、ルーシーは、アスランを全面的に信頼して、自分をアスランにゆだねることがなかなかできなかった。エドモンドは悩みながらもルーシーを信じようと努めた。

そして、四人の子どもたちが自分の内部の不信との靈的相剋を通してアスランとの関係を回復した時に、ナルニアを回復するという大きな仕事の半分以上が成し遂げられたと言ってよい。事実、ルイスは、子どもたちがアスランと出会うまでの経過を語るのに、この作品の頁数の約三分の二を要している。

しかし、巧みな語り口と緻密な構成は決して読者を飽きさせない。読者は子どもたちと同じ視点に立って悩みつつ謎を解いていく。

後半は、子どもたちと外敵との武力闘争と、アスランによるナルニア全土の覚醒という二本の流れを中心に展開し、やがて、それは一本の流れに集約されていく。

そして、後半の可視的肉体的闘争は、前半の靈的相剋と対応するものであり、肉体的闘争は靈的相剋の *incarnation*[= 顕現化]として捉えるべきであろう。靈的相剋において、その主眼が、ルーシーがスーザンを言い負かすことにあったのではないように、肉体的・武力的闘争においても、その主眼はミラツを殺害し、テルマール軍を打ち破ることではなかった。⁴⁵前者の主眼は、あくまでも、アスランと子どもたちの関係を回復することであり、後者のそれは、ナルニアの回復だった。

こうした状況の中で子どもたちが紆余曲線を経て成長してゆく様子は既にみた通りである。子どもたちは自分が王位につくためではなく、カスピアン王子を救って王位につけるために試練に耐え続ける。⁴⁶(そして、それは、とりも直さずナルニアを回復することを意味する。)原題が *Prince Caspian* とあるのも、ナルニアがカスピアン王子を中心として回復すること、そして四人の子どもたちがカスピアン王子のために、靈的相剋と肉体的闘争を経ていくことを考え合わせると得心が行くであろう。

中尾セツ子氏は本書を『ナルニア国年代記』七篇中、特に優れた作品として評価している。⁴⁷テーマの壮大さ、⁴⁸靈的相剋と肉体的闘争のバランスは読者を引き込む巧みな語り口、緻密な構成と相俟って、優れたファンタジーの世界を現出させているといえよう。

※本論考は大幅な加筆修正を経て、「不信との戦い」として『ナルニア国年代記』読本』山形和美他編(国研出版、1988;増補改訂版 1995)に収録されている。

⁴³ *Prince Caspian*, p.188.

⁴⁴ *Ibid.*, p.190.

⁴⁵ 木々が動くのを見たテルマール軍の兵士たちは、戦意を喪失して自ら敗走する。ここにはシェイクスピア作『マクベス』の反響も認められる。

⁴⁶ Cf. Howard, p.49. 「……〔試練は〕いつもだれか他のもののためにということのように思われる」とある。

⁴⁷ 「詩人・作家としての C.S. ルイス」, p.106.

⁴⁸ Cf. *Paradise Lost* ix, ll.13-19.